

学位論文要旨

ESD の授業実践による価値観の変容
— 批判的思考力に着目して —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 社会認識教育学専修

D186806 河野 晋也

序章 研究の意義と背景 第1節 研究の背景

持続可能な開発のための教育（以下 ESD）の中心的課題は、既存の価値観を持続可能な社会を形成する価値観へと転換することである。これまでの研究では、学習者がもともと持っている価値観がどのように「持続可能な社会の担い手としての価値観」へと変容していくのかという理論は明確には示されておらず、価値観と行動の変容を目的とする ESD が十分に実施されてきたとは言いがたい。学校現場において、どのように価値観の変容を促すかという点は、課題として残されているといえる。

「持続可能性」の普遍化と実体化は容易ではなく、それゆえ外在する「持続可能性」のための教育というものは成立しがたい（今村ら、2002：98-99）。つまり、ESD においては、固定的・決定論的に特定の価値観を修得させることは求められるべきではない。ESD は、持続可能性と言う価値観が外部に明確に存在するものと考えて、それを内化していく取り組みではなく、学習者の内部に持続可能性の価値観を建設していく取り組みであるといえよう。そのため ESD における価値観変容は、学習者が自身の価値判断を批判的に見直し、価値観を構築していく力を育成することによってなされるものであり、学習者の価値観の変容を目的とした資質・能力を育成することが重要である。そこで本研究では、ESD において育むべき資質・能力に着目し、どのような資質・能力が学習者の価値観変容を促すのか、そして、どのようなプロセスを経て価値観が変容していくのかを明らかにすることを目的とした。

ESD で育むべき資質・能力については、様々な例示がなされている一方で、次のような課題も見受けられる。1つは、資質・能力間の相互関係に着目されず、資質・能力を総花的・網羅的に取り扱われているという点であり、もう1つはこれらの資質・能力が価値観の変容にどう貢献するのかという理解が不十分であるということである。ESD の目的に照らしたときに重要なのは「能力（学力）」の育成だけではなく人格の形成であり、持続可能な社会の担い手としての価値観を育むことである。以上の2つの課題

から、ESD においてどのような資質・能力を育むことが学習者の価値観の変容を促すかを研究することは、意義があると考えられる。

本研究の構成を、図 序-1 に示した。上記の課題のうち、1つ目の課題について第1章と第2章において論じ、2つ目の課題について第3章と第4章で論じた。

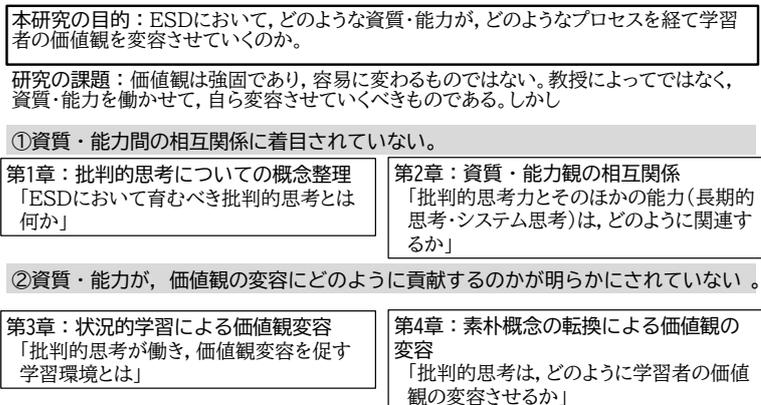


図 序-1 本研究の構成

1章 ESD における批判的思考力

これまで ESD で育むべき資質・能力の例示は、様々な研究者団体によってなされている。その

中で、批判的思考力は全ての定義に含まれている資質・能力である。本章では、前章で述べた 1 つ目の課題について述べるにあたり、複数の資質・能力の基盤となる能力として、批判的思考力を位置づける。その上で、ESD において育むべき批判的思考力とは何かを明らかにする。

私たちは、持続可能性に関する価値の重要性を認識していたとしても、具体的な状況を前にすると持続可能性を損なうような価値判断をしてしまうことがある。そのため自身の判断を批判的に検討することが求められる。また、ESD において取り扱われる課題には、複数の解があったり立場や状況によって望ましい解が変わってしまう課題も多い。見出した解が本当に正しいといえるのか、批判的に検討していくことが求められる。そのため、ESD においては批判的思考力を育むことが重要であると考えられる。

ESD における批判的思考についての先行研究について、特に社会科実践に即して論じたものを分析すると、その多くが社会の課題を見出し、より良い社会の在り方を構想する上で批判的思考力を働かせているものの、導き出した結論が学習者自身の生活にどれほどの影響を与えるものであるかという省察がされることは少ない。しかし、社会のシステムのあり方と個人のライフスタイルの問題は密接に結びついており、社会システムの変更と共にライフスタイルを見直すという双方向の変革が必要である（水山，2006）。つまり、ESD 実践における批判的思考は、「社会的事象について反省的・合理的に思考し、より良い社会の在り方を検討すること」だけでなく、「持続可能な社会の創り手としての自己の在り様を反省的・合理的に検討すること」も含むものと考えべきである。

これら二つの批判的思考がどのように働いているのかを確認するために、授業実践に即して論じた。実践は社会科実践「これからの食料生産」（小学校第 5 学年）である。学習者は、「なぜ食料自給率は高い方が良いのか」という問いを中心課題として学習をすすめた。特に、後者の批判的思考を働かせて自身の価値観や捉え方を吟味・省察するためには、他者と自身の捉え方を比較し、そのずれに気付くことが必要である。本実践においては、農業そのものに学習者が参加することはできないが、「より良い農業の在り方について検討する」という場を社会科学習の中に設定し、ゲストティーチャーや他の学習者と共に参加し、対話を重ねたことで、相互の捉え方や考え方を吟味・省察することができたといえる。

2 章 批判的思考力を基盤に据えた ESD における資質・能力

ESD において育むべき資質・能力については、前章で述べた批判的思考力の他、未来像を予測して計画を立てる力や多面的、総合的に考える力など多様な資質・能力が想定されている。現代社会の諸課題は、複雑で原因が不明瞭であり、長期的な影響をもち、矛盾や葛藤をはらんでおり、こうした課題解決に取り組むためには、各能力を個別のものとして育むのではなく、学習全体を通して多様な思考力を働かせ、育んでいくことが求められる。そこで本章では、ESD で育むいくつかの能力のうち、批判的思考を基軸として整理分析し、様々な能力を統合的に働かせる必要があることを論じる。

海外では、能力間の相互関連性に着目した研究も見られる。高橋・ホフマン(2019)や、Wiek, A., et al (2011)などは、能力を統合的に育む必要性について述べ、中でも批判的思考力は、様々な能力に関連し、基盤として働くものとして位置付けられている。しかし、これらの研究は実践に即して論じられたものではなく、具体的にどのように能力が相互関連性を持つのか、基盤としての批判的思考がどのように他の能力と関連するのか、という点については論じられていない。

そこで、多様な資質・能力のうち、長期的思考とシステム思考を例として概念整理を行い、批判的思考との相互関連性について論じる。長期的思考力は、将来世代の視点に立って選択を考える力である。世代間の公正を実現していくためには、現代世代の生き方や社会の在り様を批判的に吟味・省察するということが必要であり批判的思考の1つとして位置付けることができる。またシステム思考力は、同世代・他地域に住む「議論に参加していない立場の人」の視点に立って社会の在り方や自己の生き方を吟味・省察する思考力であり、批判的思考の1つとして位置付けることができると考えられる。

これらの資質・能力を統合的に働かせ、判断を行っていく様子を、授業実践「わたしたちの願いをかなえる政治」(小学校第6学年社会科)に即して論じる。実践では、学習者が、他地域に住む人の立場や将来世代の人の立場に立つことで、自身の考えを批判的に検討していった。

上記の実践の分析を踏まえ、ESDで育むべき能力の基盤として批判的思考力を位置付け、将来の世代に配慮して自身の生き方や社会の在り方を批判的に吟味・省察するという長期的思考と、他地域に住む人々など多様な現代世代に配慮して自身の生き方や社会の在り方を批判的に吟味・省察するというシステム思考が、伴って働くものであることを示した。

3章 価値観の変容を促す状況的学習

批判的思考力をはじめとするESDで育むべき資質・能力がどのように学習者の変容に資するかという点は十分に議論されているとは言えない。当たり前になったライフスタイルを批判的に見直すことは至難の業であり、原(2012)は、子どもたちの価値観を規定しているものは生活上の意識や欲求であるとし、一時的な気づきや問題意識は価値観変容にまで影響を与えることは少ないと述べた。本章では、どのような学習環境において、私たちは自身の価値観やライフスタイルについて批判的に見直すことができるようになるのかを論じる。

ESDにおいては地域教材の活用や社会参画など、文脈に即した学びが重視される。それは地球的諸課題が、地域の具体的な状況において多様な問題事象として現れるからである。どのような地球的課題があるかを理解するだけでなく、個々の具合的な状況において問題や対処法を見付け、構築していくこと、解決に向けて具体的な行動を選択していくことが求められる。一方で、こうした取り組みにおいては、いかに社会参画を促すかという手法に注目が集まり、地域の文脈に即した学びによってどのように価値観が変容していくかという点については、十分な議論がなされているとは言い難い。

文脈的な学びをデザインし、価値観変容との関連について考察する上で援用するのが状況的学

習論である。状況的学習論において、学習者の目的は、実践共同体への参加を通して熟達者もつ知識や技能を身に付けること、そして共同体の中での「熟練のアイデンティティ」を身に付けていくことにある（J. レイヴ：E. ウェンガー，1993）。学習者がアイデンティティを身に付けていくためには、共同体における熟達者（持続可能な社会を構築する主体）の在り様と自身の在り方を照らし合わせ、両者の間にあるずれに気付かせることが必要である。つまり実践に参加する過程で自身とは異なる他者と対話，協働を行い（アクセスの保障），自分の一貫性が崩されるようなコンフリクトが必要である。

以上を踏まえ、学習者の変容を促す批判的思考を働かせる学習デザインとして、状況的学習論を援用した、総合的な学習の時間「たったひとつ残った正倉」の実践を行い、考察した。

実践では学習者にとって身近な文化財・正倉院について、ボランティアガイドや正倉院事務局職員，発信先である校内の他学年児童といった人材へのアクセスを可能なように設定した。自由なアクセスは、多様な視点を子どもに持たすことを可能にし、それによってコンフリクトを生み出した。特に、ボランティアガイドの価値観と自分のそれとのずれに気付くことで、自身の捉え方，価値観を見直していく様子が確認された。

上記の実践をふまえ、ESDにおける価値観や行動の変容のための資質・能力として批判的思考が働くには、具体的な文脈に根差した学習，状況的な学習が有用であるということができる。学習者にとって当たり前で疑いようのない自己の価値観を，批判的に吟味するには，具体的な文脈の中で自身の価値観やそれに依拠した考えが通用しないという，一貫性のずれに気付かせることが有用である。他者が自身とは違う選択をしている場面に出会い、「なぜそういう行動をとるのか」という問いを探究し，活発に対話を繰り返し，その結果彼をとりまく状況や文脈を含めて理解に努めていくことで，自身の価値観や行動を省察・吟味していくことが可能になる。このようなコンフリクト，揺さぶりの設定が自己の再構築に資すると考える。

4章 ESDにおける素朴概念の転換による価値観の変容

本章では，コンフリクトを経験した学習者がどのように価値観を変容させていくのかというプロセス，つまり学習者の内面において，どのように批判的思考が働き，価値観が変容していくのかを述べる。

認知科学や学習科学の分野では，日常生活での経験から形成する自然現象，社会的事象に対する知識，概念，見方や考え方を総称して素朴概念または素朴理論という。素朴概念は非常に強固であり，価値観の変容を妨げることがある。価値観を変容させていくためには，自身にとって当たりのことからである素朴概念を批判的に吟味する必要がある。

上述の事柄を踏まえ，これまで社会科教育の分野で論じられている価値学習論について，以下の点から考察した（小原，1991；森分，1996；水山 1997；吉村，2003；豊畷，1999；溝口，2001，溝口，2002；紙田，2016，紙田，2018）。

まず一点目はどのような問題を取り扱うかである。これまでの社会科教育研究では社会論争問

題によって、価値観形成を促す実践が多くみられた。ただし、社会論争問題を扱う際には、論争問題に内包される葛藤状態を、学習者が自身に関わるものと認識できなければ、ライフスタイルの変容は起こりえないと考える。

次に、日常生活の中で培った素朴概念をどう乗り越えるかという点である。学習者が自身に内在している価値と相対する必要性に言及している先行研究は多いが、素朴概念や概念変化の困難さに言及し、それを転換する方略についてはふれているものは見当たらない。ESD において重視されるライフスタイルの転換は、それまでの日常生活で育まれた強固な素朴概念に対していかに批判的思考を働かせるかという視点が不可欠である。そこで本章では、素朴概念の性質を明らかにすると共に、概念変化の方略を採り入れた学習過程を提案することとした。

素朴概念を発展させ、理解を深めるための学習方略は、西川・冬野（1998）、栗原（2007）、呂（2015）らによって検討されている。これらの研究を踏まえ、価値観変容を目指す ESD 学習方略として 1) 問題の発見、2) 素朴概念の明確化、3) 葛藤教材による認知的葛藤、4) 持続可能な社会の担い手としての価値判断、5) 応用という 5 段階を設定し、実践構想を行った。

学習者が素朴概念を乗り越え、持続可能な社会の担い手としての価値判断の育成を図る学習単元として、「鹿と共に生きるならの町」を構想した。奈良公園の近隣に生活する学習者は、奈良公園の鹿は愛すべき存在、守るべき存在という素朴概念を保持していると考えられる。本授業実践においては「鹿を保護するべきだ」という素朴概念を吟味させ、必要に応じて転換させて、よりよいまちの在り方を考えさせることをねらいとして、学習計画を立案した。

特に、前節で示した学習方略中、3) の認知的葛藤場面において、専門家の視点を得て見直し、現地に行って普段目にする事のない実態を知ることによって、「鹿を人の行為から守ることは、自然に優しい行為だ」という学習者にとって当たり前になっている素朴概念が通用しない状況に気づき、吟味することができるといえる。

ESD がめざすのは、表層的な変容に留まらず、その後の行動やライフスタイルに影響を与えるような継続的な価値観、考えの変容である。学習による変容がその後の生活においても維持・継続されるためには、強固で変わりにくいという性質を踏まえた学習方略が不可欠である。日常的・経験的に形成された既存の素朴概念は新たな価値観形成を妨げたり促進したりするものであり、少なからず影響を与える。「どのような価値観へ変容したか」だけでなく、学習者が既に保持している価値観に焦点を当てて学習をデザインしていくこと、どのように批判的思考を働かせ、自身の素朴概念を転換させていくかを検討することが求められる。

終章 研究の総括

本研究の意義は大きく 2 点である。

まず 1 つ目は、ESD で育むべき資質・能力、持続可能な社会の担い手として学習者が変容していくために必要な力を、批判的思考力を基盤として位置付けたことである。ESD においては、本来能力開発にとどまらない全人的な発達や組織全体での変容が強調されるべきであるのに、その

本質が反映されていないことは課題である。そこで、本研究では複数ある資質・能力を、批判的思考を基盤に据え、その相互関連性を明らかにすることで解決を試みた。

2つ目に、ESDで育む資質・能力、特に批判的思考が、どのように価値観の変容に資するのか、求められる学習環境と変容の学習方略を明らかにしたことである。特に本研究では、学習者がその以前から生活経験や既習学習の影響を受けて強固な価値観を保有しているという前提を重視した。学習者が自身の強固な素朴概念を再構築していくことができるよう、資質・能力を育むとともに、批判的に自己を見直すことができる学習環境と学習方略について示した。

一方、課題として、特に素朴概念の転換については、一層の研究が必要である。なぜ価値観の変容が起きたのかをより詳細に示すためには、素朴概念の転換に伴って学習者の認知がどのように変容していったのかを詳細に分析することが必要であろう。今後の研究課題としたい。

【参考文献】

- 今村光章，石川聡子，井上有一，塩川哲雄，原田智代（2002）『『持続可能性に向けての教育』の意義と特質』，日本環境教育学会『環境教育』11巻2号，pp.96-104
- 紙田路子（2016）「主体的な価値観形成のための社会認識過程」，岡山理科大学『岡山理科大学紀要 B 人文・社会科学』52号，pp.71-81
- 紙田路子（2018）「小学校社会科授業における価値判断の分析対象：多面的な価値判断基準の育成を目指して」，日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』41巻2号，pp.41-50
- 栗原久（2007）「学習者の素朴理論の転換をはかる社会科授業の構成について：『山小屋のジュースはなぜ高い』」，日本社会科教育学会『社会科教育研究』102巻，pp.62-74
- 小原友行（1994）「社会科における意志決定」，社会認識教育学会編『社会科教育ハンドブック：新しき視座への基礎知識』，明治図書，p.167-176
- 高橋敬子；ホフマン・トーマス（2019）「システム思考コンピテンシーをどのようにして強化するのか？：日本の気候変動教育における学習手法『ミステリー』の可能性」，日本環境教育学会『環境教育』29巻2号，pp.14-23
- 豊嶋啓司（1999）『『構成主義的』アプローチによる社会科『意思決定』型学習指導過程』，全国社会科教育学会『社会科研究』51号，pp.41-50
- 西川純；冬野英二郎（1998）「状況依存」，『キーワードから探るこれからの理科教育』，東洋館出版
- 原郁雄（2012）「ESD実践のための価値変容アプローチ」，日本国際理解教育学会『国際理解教育』18巻，pp.53-62
- 水山光春（2006）「批判的シティズンシップの育成をめざす社会科授業：シティズンシップ地理をとおして」，全国社会科教育学会『社会科研究』64号，pp.11-20
- 水山光春（1997）「合意形成をめざす中学校社会科授業」，全国社会科教育学会『社会科研究』47号，pp.51-60

- 溝口和宏 (2001) 「開かれた価値観形成をはかる社会科教育：社会の自己組織化に向けて：単元『私のライフプランー社会をよりよく生きるためにー』の場合」, 社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』13号, pp. 29-36
- 溝口和宏 (2002) 「開かれた価値観形成をめざす社会科教育：『意思決定』主義社会科の継承と革新」, 全国社会科教育学会『社会科研究』56号, pp. 31-40
- 森分孝治 (1996) 「社会科の本質：市民的資質教育における科学性」, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』74号, pp. 60-70
- 吉村功太郎 (2003) 「社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業」, 全国社会科教育学会『社会科研究』59号, pp. 41-50
- 呂光暁 (2015) 「児童の素朴理論を生かした小学校社会科経済学習：科学的社会認識の形成を目指して」, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』124号, pp. 14-26
- J. レイヴ; E. ウェンガー, 福島真人訳 (1991=1993) 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』, 産業図書
- Wiek, A. ; Withycombe, L. ; Redman, C. L. (2011) “Key Competencies in Sustainability: a Reference Framework for Academic Program Development” In Integrated Research System for Sustainability Science 6, pp. 203-218, United Nations University, Springer,